



年間第 23 主日 (マルコ 7:31-37)

イエスは深い息をついた

少なくとも、今週までは長崎大司教教区は「公式ミサの中止」を設定していると思います。この説教は8月20日に作成していますが、人間の知恵では3週間後がどうなっているのかさえ見通せないのです。イエス様のようなお考えに沿ってではないですが、中田神父も「天を仰いで深く息をつき、『エッフアタ』」と言いたいところです。

新型コロナウイルスの猛威に苦しむ全人類は、解放を求めてうめいています。人間はしばしば人間的な解決策を求めようとするので、「早くワクチンが全世界の人に行き渡って欲しい」「できればワクチンでなく、治療薬が開発されて欲しい」「過去の病気のいくつかのように、新型コロナウイルスを撲滅して欲しい」さまざまな欲求が噴出しています。

しかし現実には予想よりも残酷な場合があります。ウイルスは少しずつ変化して生き残ろうとします。より良いワクチンや治療薬が見つかっても、それを無力化してしまうような強いウイルスが現れるかも知れません。人間は医学や科学技術の進歩に希望を置きますが、現実はその希望を絶望に突き落とすことがあるのです。

何度も無力感に襲われている人類を救ってくれるのはいったい誰でしょうか？新しい人類でしょうか。私は、今週の福音朗読がその答えなのだと思います。イエスは耳をふさがれ、舌がしばられた人の苦痛を自分の身に引き受け、そこからの解放を求めて深い息をつき、「エッフアタ」と叫びます。人類の苦しみを解放できない人類に寄り添って、深い息をついてくださるイエスが、私たちの救いなのです。

確かに、科学技術や医学の進歩は、私たちに希望をもたらします。それを否定はしませんが、皆がその恩恵に与っているわけではありません。新型コロナのワクチン接種でも、先進国と途上国では格差があります。ワクチンが途上国まで行き渡るのか、誰も見通しを持っていません。

しかし苦しみを一緒に担い、共に深い息をついてくださるイエス・キリストには格差はありません。イエスは小さくされた人々のそばにいつもおられるからです。ため息をついている人のそばに、先進国の人々が期待することからこぼれている人々のそばにいつもおられるからです。

イエス・キリストを世界中の多くの人が救いの源にしてくれたらどんなに素晴らしいでしょう。弱い人々の友であるイエス・キリストの思いを理解して、先進国がイエス・キリストの思いを途上国の中で、さまざまな恩恵から漏れてしまっている社会の中で実現しようとするなら、どんなに素晴らしいことでしょう。

私たちにもできることがあります。「イエス・キリストは私たちの希望です」と証しすることです。「イエスは私たちの為に深く息をついてくださるお方です」と知らせることです。ぜひ今週、希望を失いかけている人のために力になってあげてください。このコロナ禍にあって、あなたが「深く息をついて」そばにいてください。ミサに参加できなくても、私たちはちゃんとイエス様を喜ばせる方法を持っているのです。